
blue sky

SugarChain

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

blue sky

【NZード】

NZ0891E

【作者名】

Sugarchain

【あらすじ】

ずっと君を探してた。幾度転生しても、君だけを探していた。大切な君。いなくなってしまった君。

プロローグ（前書き）

著作権の放棄はしていませんので、注意ください。

プロローグ

この想いはいつか空へ帰るのだろうか？

遠い遠い小さな惑星で咲いた花のような、小さな小さな恋心。

ほんのりと優しい桜色に染まって。

ある日消えてしまった。

そして僕は君を探し続ける。

だって、ずっと君を忘れられないから。

君を探しながら、

君を求めながら。

僕は何度生まれ変わつただうつ。

それでも君を諦めない。

諦めることなんて出来ない。

再会（前書き）

著作権は放棄していませんので、注意ください。

再会

「見つけた。」

淡いピンクの花びらが舞い散る中、やっと見つけた。

ずっと探していた君。

髪の色も。

肌の色も。

瞳の色さえ変わってしまったけれど。

全てを包み込む清らかな水のような雰囲気。

それだけは変わらない。

「お~っ、和葉^{カズハ}、あの子めっちゃ可愛くね？」

俺、声かけてこよつかな～？」

高校からの友人の晶^{アキラ}が指さした先には「君」がいた。

「そうだな。あの子も新入生っぽいし。誘つて皆でカフュテリアで
も行くか？」

「やつた～っ、珍しいな、和葉が許してくれるとは思わなかつたぜ。」

「

晶の返事につい苦笑してしまつた。

俺の許可なんてなくとも言に出したら聞かないくせに。

喜びながら「君」と近づく晶を追うよつて「君」と近づく。

ああ、ちょっと困った顔してるなあ（苦笑）。

「ほんまにめんね、こいつが急に。

君も新入生だよね？

俺は和葉。で、こっちの軽そつなのが明。

今からカフュテリア行こうかって話してたんだ。

良かつたら君も行かない？

「お誘いありがと。

私は雪。

和葉くんと晶くんね、よろしく。」

こつこつと柔らかな笑顔は変わっていない。

一体どのへりに経つたのだね。

「君」がいなくなつてから、ずっと探し続けていた。

魂までも変わつてしまつていたらと不安だった。

だが、それは杞憂だつたようだ。

発案（前書き）

著作権は放棄していませんので、注意ください。

「海行きたーいっ。」

べしゃっと音がしそうな勢いでテーブルに顔を伏せた君。

わいらりと髪が落ちる。

「海??なんで?まだ寒いじゃん?」

「だつて、去年は勉強して行けなかつたんだもん。

大学に入つたら友達と行きたいって思つてたのー。」

そつかー、なんて納得しつつも晶は行く気がないらしー。

「イツことっては水着の女の子がいない海は海として認められない

らしい。

ちゅつとガッカリしてこの雪に、いつ行く?って聞いたら嬉しそうな笑顔が返ってきた。

「今度の土曜日ー。」

「分かった。晶も土曜空いてるよな。」

わきまでは乗り気じゃなかつた様子の晶も、もちろん!なんて元気に返事している。

俺が知っていた「君」は「慈愛」という言葉がぴったりで。

それでいて大抵は悲しそうな顔をしていた。

今生きてこる世界とは違つて「平和」という言葉とは程遠いところだつたから。

全身で嬉しいとか、がっかりとか、そういう感情を表現しているような「雪」は「君」とはまるで別人のようだけれど。

それでも俺は「雪」になった「君」を見つけ出した。

「君」の笑顔がもつと見たい。

俺はわがままだらうか。

でも、わがままでも「君」が笑顔になるならそれで良いと思つてしまふ。

結局カフェテリアで一時間ほど雑談をした後、メールアドレスを交換し解散となつた。

晶も俺も一人暮らしをこの春から始めたのだが、お互いのアパートは結構近かつたりする。

帰り道、晶は雪と出会えて超ラッキー、神様ありがとう……なんて

言ってたけど。

俺も一緒になつてふざけて神様ありがとつーつて言つたら驚いた顔してたな。

「君」以外の女の子には興味なかつただけなのに、どうやら晶は俺のことを誤解していたらしい。

おおっ、とうとう和葉も女に興味を持ち始めたか！今日は赤飯だな！なんて失礼なことを言つていた。

海（前書き）

著作権は放棄しておりませんので、注意ください。

雪と出会えて変わったこと。

俺の中にずっとあつた孤独がなくなつた。

ずっとずっと「君」に会いたかった。

何度転生しても「君」を忘れられなかつた。

無駄だと思った時もあつた。

でも、「君」にまた出会えた。

「雪」は「君」とはまるで別人だけど。

別人で良かつたと思える事がたくさんある。

今の「君」が生きている世界が平和なこと。

今の「君」には両親がいること。

今の「君」は笑えること。

それは普通なのかもしれない。

でも、俺にひとつはとても大きなこと。

「和葉とパーもおこでよ～。」

波打ち際で雪と晶が遊んでいる。

雪が女一人で居ずらいかなと思つて実家から車を借りるついでに犬も連れてきたのだが、そんな心配はいらなかつたようだ。

雪は昔からの友達のように俺達に接する。

「パーは濡らすと母さんに怒られるからダメ。」

俺は何度庭の子ども用ビニールプールでパーを遊ばせて母さんに怒られたことか。

もう思い出せないくらいだ。

それによく今日が暖かいとはいえ、まだこの時期だと小型犬が全身濡れてしまつたらすぐに乾かさないと風邪をひくだつ。

ちえつと言にながらも納得したのか雪がこいつにやつてきた。

「パー、かわいいよね。何歳?」

「俺が中学に入った頃に家に来たから、、、そろそろ7歳だな。」

ふ～ん、そつかあなんて言いながらパーと遊び始める雪。

つうか、パーに遊ばれてないか?

「和葉、勝負だつ！」

振り向くと畠がいつの間にか波打ち際からひそかにやつてきていた。

、、、そのへんに落ちていたであるつボールを手にして。

パー(前書き)

著作権は放棄しておりませんので、注意ください。

プー

いつも通りの晶のいたずらに付き合は、プーに下敷きにされていた雪も救出して帰路についた。

「晶、お前そろそろ落ち着けよ、、、。」

「えつ？なんで？？落ち着いてるじゃん、俺。」

ぶはっと噴き出す音が隣から聞こえる。

「雪、、、人のこと笑えないぞ？」

「プーに遊ばれてただろう？」

「だつて、プー可愛いんだもん。

ていうか、プーって本当に7歳？

ペットショップで見かける生後三ヵ月くらいのトイプードルと同じ大きさなんだけど。」

「7歳だ。

家に来た頃に病氣ばかりしてたからな。

そのせいでも小さいのかもしれないな。」

そう言つたら雪は「君」だつた頃のように悲しそうな顔をした。

晶はアーティストで母さんが心を痛めていた事を知っているからか、何も言わない。

「めんつて、隣からかすかに聞こえた。

雪が気にする」とじゃないの。

俺も、つい、ごめんつて言つてた。

腹減つた、なんて言いながら晶がお腹を鳴らした。

マジかよ？

さつき、モスに寄つて食べただろ？

そいつと晶は、俺は燃費が違うの！なんて偉そうに言つた。

雪と俺は苦笑するしか出来なかつたけど。

苦笑でもいい。

雪が笑つてくれるなら。

雪は世のひとなんて覚えていない。

それでも、俺は雪の悲しそうな顔なんて見たくない。

ずっとずっと笑っていて欲しい。

だって「雪」は「頬」だから。

そして「君」はこつも悲しそうだったから。

戦争（前書き）

著作権は放棄しておりますので、注意ください。

戦争

俺達が最初に出会ったのは彼のへりこ昔なんだね!」
。

それすらも分からなによつた遠い昔。

「君」と俺は出会った。

戦地から逃れるためのシャトルの中で。

「君」は不安そうな顔をしていたけれど。

それでも他の子供のように泣いたりはしていなかつた。

次に出会つたのはHテインに移住してから。

「君」は穏やかな表情だつた。

俺はやう思つた。

誰と話すとも慈愛に満ちてゐる表情。

柔らかな声。

あつと「君」は運命を受け入れたんだと思つた。

そつ錯覚するほどの笑顔だつた。

でも。

ある夜「君」を見てしまった。

月明かりの中、ひつそりと涙を流す「君」を。

衝撃だった。

「君」は運命を受け入れていると思つた。

他の泣きわめく子供達とは違つと思つた。

戦災孤児仲間とは、昔聞いた聖母みたいだつて言つていた。

そんな「君」が泣いていた。

俺は、その瞬間から君を好きになつたんだと思つ。

一段上の存在ではなく、自分と同じ生き物として。

尊敬すらした。

そして俺は「君」に近づいた。

「どうしたの？君は笑顔なこまるで泣いていたんだね。
俺がそう言つと「君」は驚いた顔になつたね。

俺がそう言つと「君」は驚いた顔になつたね。

それから俺達は戦争の事や親の事、友達のことなんかを話した。

そして俺は「君」が一人ぼっちになってしまった事、それでも他の戦災孤児の面倒を見るボランティアをしていることを知った。

「私には沢山の兄弟がいるのよ。

きつと今、この瞬間にも兄弟達は増えているんだわ。

だから泣いてなんかいられないの。

だって私が泣いてしまったら、兄弟達も泣いてしまうかも知れないでしょう?」

「君」は沢山の戦災孤児を「兄弟」と呼んでいた。

そして「兄弟」達のために君が笑っている事を俺は知った。

Hits (前書き)

著作権は放棄しておりませんので、注意ください。

Hikan

戦争を逃れて辿り着いたエーテン。

「君」はやいで穏やかに暮らしていた。

「兄弟」達の面倒を見ながら。

戦争の爪痕は残っていたけれど。

それでも俺は「君」がこれから幸せになるんだと思つていた。

「じめんね、あなた達を置いていつてしまつわ。

本当はもつとずっと一緒にござりると想つたけど。

こんなに早くご母様達のところへ行けるなんて思つてなかつた。

ありがとう。」「

「君」はその言葉を最後にいなくなってしまった。

「君」だけじゃない。

エーテンを病が襲つていた。

致死率90%の病は、Hテンに住む子供達を天国へと送っていた。

子供だけが患う奇病。

Hテンは戦争から逃げる事を許さなかった。

『えりれた罰。』

そつとしか考えられない病だった。

「和葉、お昼食べに行こう。」

驚いた。

気がつくと晶と雪が目の前にいた。

昔のことを思い出していた俺は、一人が来たことにも気付かなかつたらしい。

「で、難しい顔して何考えてたんだ?」

「うーん、デートの誘い方かな?」

冗談が口をついて出た。

「「えつー?」

晶はともかくとして、心ひして雪まで驚くのか？

まあ、いつも俺が一人とつるんでるから女のトビの田舎こなないつて思われているのかな。

「いかがですか？雪姫。

」のわたくしめどアートして頂けませんか？

〔冗談っぽく誘つて、片手を差し出してみた。

「喜んで…」

つて、ヽヽヽヽヽ晶が返事するんだ？？

まあ、雪が笑つてくれたからそれで良いくだな。

ポート（前書き）

著作権は放棄しておりませんので、注意ください。

パート

海に行つてから2週間経つが、俺達は「こんな感じでなんとななく日々を過ごしている。

時折昔の事を思い出す俺。

大抵、晶か雪がやつてきて現実に引き戻される。

俺は「君」を待っていたが、「君」が田の前にいるだけで、「君」が笑っているだけでそれ以上望む事はない。

「和葉、見て見て！」

「あの魚可愛い～。」

「ん？ どれ？」

「あの青こやつ？」

「うそっ。 小さくひらひらして可愛い～。」

「うづづの方方が可愛い～と思つたけど、そんな事言つたら真つ赤になつて呪へのでやめておへ。

「雪の方が可愛い～じやん？」

晶、、、自爆だな、なんて思つてゐると予想通り真っ赤になつた雪に叩かれていた。

そう、結局ゲートに行くことになつた。

晶と雪との3人で。

今回は晶が提案した水族館だ。

水の中にいるみたいで気持ち良いんだつて昔言つてたのを聞いた事がある。

晶の水族館好きは変わつていらないらしい。

俺もこの独特的の青い空間が好きではあるが。

「なんか、喉渴いたな。

入口のところに自販機あつたから後で寄りつい。

「おひ。」

晶の誘いに俺も喉が渴いてゐることで気付く。

俺も意外と単純なのかもな。

心の中で苦笑しながら雪に手をやると。

雪は、高さ3メートルはあるであろう大な水槽に手をついて立つ

ていた。

青い光がさす中、まるで何かを祈つてゐるかのよつと。やつぱり「君」なんだな、と改めて思つ。

思わず見つめてしまつた。

「君」を見守りたい。

「君」を見守りたい。

「君」が笑顔でこゝられるよつと。

「君」が悲しまないよつと。

でも。

「君」は「雪」になつた。

何度も転生したか分からぬけれど。

「雪」は「君」で、「君」は「雪」。

俺が守りたかった笑顔は「君」だけだ。

それは生まれ変わつても同じだと思つていたけれど。

「雪」を「雪」として見れない氣がある。

「君」の面影を見つけてしまつ。

「雪」の中に「君」を見つかると懐かしさでこづぱこづなる。

これは良くない事かな?

「和葉ひ、何せ～つとこいの～

お腹空いた?」

気がつくと雪が田の前にいた。

君（前書き）

著作権は放棄しておりませんので、注意ください。

君

「君」を見つけたせいか、以前よりぼ～つとする事が多くなつた。

小さな事に「君」と「雪」の違いを発見する。

小さな事でエーテンでの暮らしを思い出す。

「お前、最近ぼ～つとしてるよな～。」

「大学に入ったからって氣を抜くんじゃないぞ？」

晶にまで言われた。

食欲と元気だけが取り柄みみたいな晶に。

とはいって、晶もある程度勉強が出来たから同じ大学に入ったわけであり、＼＼＼。

言い返す言葉がないな～と思いつつも、勉強疲れが今頃出たんだよ、と笑つておいた。

なら仕方ないな、と返されたけど、それでいいのか、＼＼＼。

そのまま晶は雪に友達を紹介してつと頼み込んでいる。

“どうやら雪の友達にタイプの子がいたらしい。”

「いこよー、なんて雪は返事してゆナビ。

雪に氣があると思っていたと後で嘘に言つたら、馬に蹴られぬ返はねえよつと意味の分からぬ返事をしてきた。

「君」の柔らかな笑顔。

シャトルで出会つた時は砂埃でパサパサになつていた髪。

ほんの少しの荷物。

Hテインで再会した「君」は清流のよつて滑らかな髪を風に揺りしだ。

沢山の「兄弟」達と笑いあつて。

小さな「兄弟」が泣くと聖母のような笑顔で相手をしていたつ。

「君」が見当たらない時は俺はいつも大きな木の下に行く。

大抵は星の明るい晩だけど。

君は母星のある方を見つめて、誰にも見つからぬこよつてひびきと泣いていた。

俺が行くと慌てて泣いてないふりしてたけど。

でも俺は「まかされなかつた。

一度、ほんの偶然で君の涙を見てしまったから。

だから「君」の姿が目の前からなくなると俺は「君」を探した。

「君」にとつて良かつたのだろうか？

俺は「君」の気が紛れるなりと思つていたけれど。

でも、「君」を見つけるのはいつも同じ場所。

「君」を俺が見つけるのを許してくれると思つていた。

発病（前書き）

著作権は放棄しておりますので、注意ください。

発病

「君」の姿が見当たらないある朝。

いつもとは違うその行動に俺は焦った。

「君」が一人になるのは大抵母星が見える夜だつたから。

朝はいつも「兄弟」達と一日の支度をしていたのに。

それに、ゝゝエデンでは奇病が発生し始めていた。

母星から避難して来たのは健康な子供や戦争とは関係ない大人達。

なのに一部の子供がなぜか死んでいった。

最初は軽い熱が一週間ほど続き、その後2～3日で熱が高くなり死んでしまう。

感染経路は不明。

治療方法も見つからない。

発病するのは子供だけ。

あちこち探したけど。

「君」はいつもの木の下にはいなかつた。

「君」を見つけたのは夕方になつてから。

エデンの「森」と「砂漠」の境界にいた。

俺が見つけた時、「君」は「砂漠」の砂を掴んでは落とし、掴んでは落とし、、、。

もともと砂漠だったエデンを勝手に「森」に変えたから神様が怒つたのね、なんて言つていた。

「私も、発病したみたい。」

俺の田をまつすぐ」見つめて、「君」は言つた。

きっと俺が見つかるまでの間、ずっと一人で考えていたんだろう。

「兄弟」達の事、

病の事、

残りの時間をどうするか。

俺は何も言えず、ただ「君」をそつと抱きしめる事しかできなかつた。

それは俺が、「君」を好きなんだと自覚した瞬間だった。

#コードペディア（前書き）

著作権は放棄しておつませんので、注意ください。

キュー・ペッシュ

俺が「君」を好きだと自覚した5日後に君は死んでしまった。

何もしてあげられなかつた。

「君」を守りたかつたのに。

「君」に笑顔をあげたかつたのに。

空気感染も接触感染もしない病は、どんなに俺が願つても俺に感染する事はなかつた。

「君」も俺も微妙な年齢だつたのだろう。

そして「君」は感染し、俺は感染しなかつた。

「和葉、ダブルティーじょっぴやつ。」

「は？？つづか誰とするのわ？？」

「和葉と雪だろ、で、俺と早苗ちゃんさなえ」

「なんだ、うまくいったのか。

良かつたな。

お前、意外と奥手なところあるからな。」

まだ連絡先交換しただけだよつ、だから頼むーなんて言われたら断れないのが俺。

「じゃあ、一応雪に聞いてみるけど。

雪と付き合つてゐわけじゃないから断られたら諦めひよっ。」

「頼むー恩にきみが。」

満面の笑顔で晶は次の講義に向つていった。

俺も雪も次の時間は講義がない。

手短に用件だけをメールで送る。

すぐに返信があり、見ると「マジ?」の文字。

カフフテリア、とだけ返すとスクイクとの返信。

のんびりコーヒーを飲んでいると、雪がホットココアを手にやつてきた。

「で、何?ダブルティーって。

早苗と晶、うまくいつてゐるの?」

にこにこしながら聞いてくる。

「どうやらダブルデートという言葉には抵抗がないようだ。

「まだ連絡先交換しただけらしい。」

晶のやつ、あれで意外と奥手だからダブルデートに誘うのが精一杯みたいなんだ。

で、雪が嫌じやなければ4人でどこか行かないか？」

「うんっ。わーい、キュー・ピッドだ

どこに行こうか？

「楽しみだね」

「晶はどうでも喜ぶから、早苗ちゃんに行きたい」ところ聞いてみて貰えるか？」

「オッケー。」

次の講義、早苗と一緒にだから聞いておくね。」

ようしく、と返事をし、その後は雑談に変わった。

夏にはバー・ベキューがしたいとか、花火がしたいとか。

しかもメンバーがダブルデートの4人。

晶が振られるとは考へてもいよいよだ。

最終話（前書き）

著作権は放棄しておりますので、注意ください。

最終話

早苗ちやんの提案で俺達は遊園地に来た。

「五月とはいえ、もう暑いね~。」

「そうだな。

つか、この口差しの中一時間も並ぶなんて普通しないぞ?」

えへっ、だってコレ乗りたかつたんだもん、なんて言いながら雪が笑う。

田差しと生い茂る縁。

昔の「君」の笑顔と重なる。

「何か飲み物買つてくれるよ。

何がいい?」

「ウーロン茶!」

「あたしはオレンジジュース!」

笑顔で答える雪と早苗ちやんをその場に残し、晶を連れて売店へ向かう。

今回は俺が払う、と晶が言ったので甘えることにした。

そもそもは晶と早苗ちゃんのために来たんだし。

俺は自分の分にアイスコーヒーを、晶は「一ラを買って一人のところへ戻った。

「おかげで。ありがとう。」

「君」と同じ笑顔で笑う雪。

オカエリ、がぢりじよつもなく懐かしい。

Hテンにいた頃も「君」はオカエリ、と言つてくれた。

懐かしさのあまり、つい空を見上げた。

「君」といたHテンはここからでは見えないけれど。

それでも「君」があの頃の俺を待つてくれているような気がした。

大気に溶けて俺に手を差し出す「君」。

俺はあの頃の「俺」の気持ちを吐きだすように大きく息をつく。

そうすれば「俺」も大気に還れるんじゃないかと思つて。

そして、雪のもとへ行く。

タダイマ、と声をかけながら。

風がすべてを吹き飛ばしたかのように俺の心はすっ飛んだ。

あつといじから今の俺の恋は始まるのだね。

最終話（後書き）

「」お読みいただき、ありがとうございます。
お話を書くのが難しいですね。

気になる和葉と雪の今後については機会がありましたらまた投稿させていただきたいくらいであります。
お付き合いいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0891e/>

blue sky

2011年1月28日02時17分発行